

浄土宗宗祖法然房源空の生涯と思想（第四七回光華講座）

著者	本庄 良文
雑誌名	真宗文化：真宗文化研究所年報
巻	25
ページ	1-31
発行年	2016-03-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1108/00000764/

第四七回 光華講座

浄土宗宗祖法然房源空の生涯と思想

佛敎大学仏敎学部教授

本庄良文

ご紹介がまことに過分な内容でしたので、恥ずかしさのあまりにこのまま帰ろうかなという気持ちになります。ご紹介いただきましたきました中身についてはお忘れいただいて、純粹に法然上人のお人柄、お言葉の一端と一緒に味わっていただければと思っております。資料がお手元に届いていると思しますので、さっそく本題に入りたいと思います。

1 時代（一一三三―一二二二、天皇・貴族の政治から武家の政治へ）

お生まれになったのが一一三三年、亡くなったのが一二二二年です。覚えやすい「いちいちさんさん、いちにいち」となっております。時代ですけれども、政治的には、保元の乱（一一五六、二四歳）、平治の乱（一一五九、二七歳）を経まして、平家滅亡（一一八五、五三歳）、鎌倉幕府成立（一一九二、六〇歳）、承久の乱（一

二二一、没後九年）…とあります。天皇や貴族が政治を司っていた時代から、武士がその役割を担っていく動乱の時代になります。それを反映してか法然上人ご自身も大変なご苦勞をなさいました。

2 武士の子

出身は美作みまさかの国、久米南条（現在の誕生寺）、今の岡山県です。お父さんは漆間うるまのとき時国という武士で、今の警察署長に当たる押領使をしておられたそうです。お母さんは中国からの渡来人の血を引く秦氏はたしです。法然上人は一人息子、小さい時は勢至せいし丸と呼ばれたそうです。「勢至」は菩薩の名前に由来します。阿弥陀様を中央にして左右に観音菩薩と勢至菩薩がおられる阿弥陀三尊像がありますが、観音菩薩が慈悲を司り、勢至菩薩が智慧を司るといわれております。小さい時からそのお名前の通り、大変利発な人であつたと伝えられております。

3 父親の死（二一九一、九歳）

ところが、お父さんが争いに巻き込まれて、法然上人が九歳の時にお亡くなりになります。当時、中央の役人と地方の豪族は対立関係になることが多かつたらしいのですけれども、伝記によりますと、お父さん（漆間時国）は在地の豪族で源氏の血を引く者であるという自覚があり、ちよつと傲慢な所があつて、莊園の管理者として都から派遣されていた預所あずかりどころの源内武者げんないむしゃ定明さだあきらの所に挨拶に行かなかつたそうです。そこで恨みを買われて夜襲に遭われます。その時、お父さんが普通とは違う遺言を残されるんです。——申し遅れましたけれども、私のお

話は法然上人の最も標準的な伝記であります『法然上人絵伝』、俗に言う『四十八巻伝』に基づいています。法然上人が亡くなられて約一〇〇年後に編纂されたものですが、最近の研究により、信憑性が意外に高いと言われるようになっております。――

さてお父さんは、九歳の勢至丸に向かって、

――汝さらに：敵人をうらむる事なかれ。これ偏に先世の宿業也

（敵を怨んではならない。自分が何か前世で悪いことをした為にこんな目に遭うのである）

――もし遣恨をむすばゞ、そのあた世世につきがたかるべし

（もし恨みを抱いて仕返しをしたら、報復の連鎖が止まらないであろう）

――しかし、はやく俗をのがれ、家を出てわが菩提をとぶらひ、みづからが解脱を求めんには

（一刻も早く出家して、私の菩提を弔いながら、自らの解脱を求めるに越したことはない）

「敵を怨んではいけない」「お坊さんになって悟りを開きなさい」という二つの、とてつもない大きな宿題です。

4 比叡登山（一一四七、十五歳）

こうしてお坊さんの勉強を始められます。お母さんの弟で観学という人が中央から帰ってきておりましたの

で、その方について仏教学の初歩から勉強します。「学問の性（学問についての生れつき能力が）、ながるる水よりもすみやかにして一を聞きて十をさとる」（『四十八卷伝』卷二）。一を聞いて十を悟るといふ表現は最近のものかなと思っておりますら、七〇年も前から文献に出てきています。非常に利発でしたので学問がどんどん進んでいったことです。その叔父さんが「この子は非常に良くできるのでこんな田舎に置いておくのはもったいない」。ここに岡山県の人がいらつしゃつたら大変申し訳ありません。伝記にはそう書いてあります（笑い）。叔父さんに「比叡山延暦寺に行つて勉強をなさい」「そこで勉強をしてお父さんの遺言を果たしなさい」と言われて、法然上人もその気になられたわけです。ただし問題がございました。お母様のお気持ちです。若くして夫を亡くして、一人息子の法然上人も手放さなければいけないということです。何とか気持ちを和らげるように、比叡山に行くことを許してくださいるように説得しなくてはいけないんです。十三歳とも十五歳とも言われますが、お母さんに向かって勢至丸はあるお経の一節を唱えます。

—— 流転三界中、恩愛不能断、棄恩人無為、真实報恩者

これは中国でできたお経のようであります。中国では出家することは親不孝。孝行をせずにお父さんやお母さんを捨てることになるので罪になるんです。それに対する言い訳（と言つたら何ですけれども）をする必要があったので、こういうお経が出来たようですが、それを讀まれました。「流転三界中（この輪廻の世においては）、恩愛不能断（人間同士の愛着を捨てることはできません）。棄恩人無為（その人間同士の愛着をふりきつて出家し、さとりを得ることができれば、もちろんしばらくの間は親不孝ではありませんけれども）、真实報恩者

（結局は真実の恩返しになります。親孝行にもなります）。というお経です。そこでお母さんは情は情であるけれども、道理に折れて出家を許されたと言われておりますが、これもどこまで史実に基づいているかは分かりません。

——形見とてはかなき親のとどめてしこの別れさへまたいかにせん

（はかなく亡くなった父親が、忘れ形見として残してくれた子とも別れることになるとは。一体この気持ちはどうすればいいのか）

という歌を詠まれたとも言われております。（ちなみに「この」は、「子の」との掛詞となっているようです。）
そうして法然上人は十三歳あるいは十五歳で比叡山に登られて勉強を始めることになります。

5 黒谷塾居（一一五〇、十八歳）

十八歳の時に隱遁生活に入られたと伝えられております。比叡山には北谷、南谷、横川よかわなどいろんな場所があるのですが、法然上人は黒谷という非常に静かな勉強や修行に適した所で、二度目の出家をされました。その理由は伝記（『四十八卷伝』巻四）によりますと、

——偏に名利をすて（ただただ名声や利得を捨て）

仏教の勉強は、得てして名声を上げていろんな利益を手に入れることに傾きがちです。当時の比叡山は、貴族出身の人は出家をして位がどんどん高くなっていきましたが、そうでない人は違うという、世俗の価値観がそのまま入っているような世界であったと言われています。法然上人は「そんなことをするためにここに来たのではない」という気持ちが強くて、純粹に修行の道に進むために隠遁されたということです。

——一向に出要をもとむる心切なり

（ひたすらに解脱のための要路を求め、心が切実であった）

こうして環境を整え、勉強しながら修行をすることになったわけです。法然上人の学問が良く進んだということとはこれまで通りで、世間での標語みたいなものがありました、「智慧第一法然房」という言い方をされたそうです。「持律第一葉上房」つまり、戒律を保つことにおいては栄西禪師が最高である、「支度第一俊乗房」、すなわちものごとの企画・立案・実行においては奈良の大仏を再建した重源さんがナンバーワンである、それに対して法然上人は「智慧第一」と言われておりました。

6 三学非器の自覚

そこまで言われたら、普通ならば、それこそ満足して幸せな毎日を送れそうなものですが、法然上人は鬱々とした毎日を送っておられました。これはもつと後になって弟子（聖光房弁長）に言われていることですが（『徹

選択本願念佛集』巻下、『浄土宗全書』四、九五頁、

—— 出離の志ふかりしあひだ

(何とか悟りを開きたいという志が深かったので)

—— 諸の教法を信じて、諸の行業を修す

(いろいろな仏教の教えを信じ、その教えの通りに修行を行いました)

—— おおよそ佛教おほしといへども、所詮、戒・定・慧じじょうえの三学をはずさず

(仏教は多岐に亘っているけれども、つまるところ、“戒” 決まりを守る、“定” 精神を統一する、“慧” 智慧を磨いて煩惱を断つ、といった三段階の“三学”をはずれることはありません)

—— しかるに、わがこの身は、戒行にをいて一戒をもたもたず

(ところが、このわたしはといえば、戒律の修行について、一つの戒も保つことができません)

—— 禅定にをいて、一つもこれをえず

(精神統一においても、一つも体得することはできません)

—— 人師釈して、「尸羅清浄ならざれば三昧現前せず」といへり

(権威者たちは、「もし戒律が清浄でなかったならば精神統一などできるはずがない」とおっしゃっています)

—— 又凡夫の心は、物にしたがひてうつりやすし

(また煩惱を断ち切ることでできない通常の人間は、あれやこれやの対象に従って、心があっちへ行ったり

こつちへ来たりするものであります)

——たとへば猿猴の、枝につたふがごとし

(例えば、猿が枝から枝へと飛び移るようなものです)

——…無漏の正智なによりてかおこらんや

(戒律を保てない、精神統一もできない、こういった状況の中でどうやって煩惱を断ち切る清らかな知恵のおこるはずがあるでしょうか)

——若し無漏の智劍なくば、いかでか悪業煩惱のきづなをたたんや

(もし清らかな智慧の剣がなければ、どうして悪業や煩惱といった束縛を断つことができましょうか)

——悪業煩惱のきづなをたたずは、なんぞ生死繫縛の身を解脱することをえんや

(悪業や煩惱の束縛を断つことができなければ、どうして生まれ変わり、死に変わりする、輪廻の世界に繋がれた我が身を解放することができるでしょうか)

——かなしきかな、かなしきかな、いかがせん、いかがせん

ひとにはどれほど「智慧第一法然房」と褒めそやされましても、法然上人の内面はこの通りであったということです。みなさまも、後でお一人になられましたら、「かなしきかな、かなしきかな、いかがせん、いかがせん」と唱えていただいて、法然上人のお気持ちを追体験していただければと思います。私にとっても非常に印象的な言葉であります。

これを総括して「三学非器の自覚」と言われています。戒律、精神統一、智慧を磨いて煩惱を断つという三種

の学習事項…

——ここに我等ごときは、すでに戒・定・慧の三学の器うつはものにあらず

（自分は現に、お決まりのコースである「戒・定・慧」の三学を行うことのできる器ではない）

という自覚に至られたのであります。

私が言うのでこんな言い方になるんですけども、このように追いつめられて、考えようによつては虫のいいことを考えられたわけです。本当は、戒律・精神統一・智慧を辿っていくべきですけども、自分はそれができないので、そのコースを通らなくてもよい道はないかと。それが次に書いてあります。

——この三学のほかに、我が心に相応する法門ありや、我が身に堪たる修行やあると

（この三学とは別に、自分の心に相応しい教えはあるだろうか。三学の器でない私の能力に叶った修行はあるだろうかと）

——よろづの智者にもとめ、諸の学者にとぶらひしに、

（多くの智慧のある人たちに回答を求め、多くの学者に訊いて回ったけれども）

——をしふるに人もなく、しめすに輩もなし。

（教えてくれる人もないし、示してくれる人もありません）

「そんな道があつてたまるか」と。「どんな仏教も、戒・定・慧の三段階を通るのが当たり前である。それをしなくてもいい道なんかあるはずがない」と、誰一人として問いかけに応えてくれる人はいない。

そこで次にどうされたか。人に聞いて分からないなら自分で探しましょうということです。信長の焼き討ち前、比叡山黒谷には「報恩蔵」という、たくさんのお経の詰まった蔵があつたそうですが、そこへ籠もつて勉強を始められます。

—— 然る間

(人に教えてもらえないなら自分で探すしかないので)

—— なげきなげき経蔵に入り、かなしみかなしみ聖教にむかひて

(嘆きながら報恩蔵に入り、悲しみながら仏典に向かつて)

—— 手づからみづからひらき見しに…

(自分で手に取つて開いて見ましたところ…)

7 善導『観無量寿経疏』に出合う(一一七五年、四三歳)

法然上人は、「蔵に詰まっているお経だけじゃなく、世間で“こんな本があるよ”“あんな本があるよ”と聞いた時には、必ず目を通します」「私の見ない仏教書はありません」(鎌倉の二位の禪尼へ進ずる御返事) というほどのことをおっしゃっています。それから、「毎日私は仏教の勉強をします。勉強をしなかつたのは木曾義仲

が都に乱入して比叡山が大騒ぎになった一日だけです」（『四十八卷伝』巻五）と。また、学問を重視しない浄土宗が開かれる前かとお考えになるかもしれませんが、五十何歳かの時、浄土宗が開かれてからも勉強をずっと続けておられたようです。何のための勉強かということをもた考えていかなくはないのですが…。

そして、決定的な文章に辿り着きます。唐の善導（六一三―六八一）の『観無量寿経疏』の一節に出会って、これならば三学をしなくても悟りを開くことができると思われたのです。

——一心専念弥陀名号

〔一心に専ら弥陀の名号を念じ〕、浄土教式に言いますと、一心にひたすら南無阿弥陀仏と唱えて

——行住坐臥、不問時節久近

〔行住坐臥に、時節の久近を問わず〕、いかなる姿勢をとっている時も、時間の長短を問わず

——念念捨者、是名正定之業

〔念々に捨てざるもの〕、一瞬一瞬に捨てないこと、持続的に称名念仏を唱えること、「是を正定の業と名づく」、これをまさしく救いの定まった行と名づける

——願彼仏願故

〔彼の仏の願に願ずるがゆえに〕、阿弥陀様がお立てになった万民救済の願いに合致するから

という一節です。「自分の力では修行ができない場合でも、一瞬も捨てないで『南無阿弥陀仏（阿弥陀様お救いください）』と唱え続けるならば、必ず最後は極楽浄土に迎えてもらえる。そして悟りを開くことができる」と

いうこの教えに辿り着いて浄土宗が始まったわけです。阿弥陀仏は「南無阿弥陀仏と唱えれば誰でも救います」という願(念仏往生の本願、第十八願)を立てておられますが、配布プリントには載せておりませんので板書します。

——設我得仏、十方衆生、至心信樂、欲生我國、乃至十念、若不生者、不取正覺

阿弥陀仏がまだ修行中であつた時に、世自在王仏という仏様に指導されて、自分が悟りを開いた時にできるであろう浄土(結局は極楽浄土になるんですけれども)をどのようなものにしたらいいかと考えられて、四十八ヶ条(四十八願)にまとめられたんです。そのうちの第十八番目に、いかなる行をした人に自分の浄土に生まれ変わってもらうかについての願を立てられました。「もし我、仏を得たらんに(もし私が仏になったとして)、十方の衆生(ありとあらゆる方角の人々)が、至心信樂(心の底から信じ願つて)、欲生我國(私の浄土に生まれたらと思つて)、乃至十念(最低十回のお念仏を唱えても)、若不生者(浄土に往生することができなかったならば)、不取正覺(私は悟りを開きません)」。悟りを開いたら必ずこうであつてほしい、最低十回の念仏を唱えた人は自分の国に生まれ変わってほしいという願いです。浄土宗系では「十念」を「十回の念仏」と解釈するんですけれども、同じ経の他の箇所では「一念」とも説かれますので、「最低一回の念仏でも極楽往生できるように」ということだと解釈されます。この阿弥陀仏の願いに即応した修行が南無阿弥陀仏を唱えることなので、戒・定・慧の三学を行わなくても悟りに至ることができる道筋があるということになります。

8 浄土宗を開く（聖道門と浄土門）

このように、法然上人は善導大師の解釈による浄土宗に帰依し、比叡山を降りて西山広谷から大谷（現在、総本山知恩院のある辺り）へ移られました。

配布プリントに、浄土宗の仏教観ということで、聖道門・浄土門と書きました。浄土宗では仏教をこの二つに分けます。聖道門は、この娑婆世界で自力によって修行（三学）を重ね、覚りを得る教え、浄土門は、阿弥陀仏の万民救済の願いの力（本願力、他力）にすぎり、極楽に往生して覚りを得る教え（三学を行わない）です。万民と申しますのは、浄土宗の解釈では、先に板書で紹介しました経文には「十方衆生（あらゆる方角の人々）」と説いてあるだけで、男とか、女とか、修行した人とか、していないとか、善人とか、悪人とか、何の条件もつけていない。位の高い聖者から、五逆の罪人といった最悪のことをした人まで、さらに言うところ、釈尊がおられる時代から、仏教がほろんだあとと百年まで。人間の幅で言うところ、たいへん立派な人からこの上なくひどい人まで、と解釈します。「本願」とは、阿弥陀仏が阿弥陀仏ではなかった時に過去において立てられた願いで、「本」は過去という意味です。その願いの力にすぎって我々が極楽に往生して悟りを得る教えを浄土門と言って、これが基本的には浄土宗になります。浄土宗は親鸞聖人によって浄土真宗に解釈されていくわけですが、その辺りの微妙な問題については私はあまり勉強しておりません。

法然上人の浄土宗は、浄土三部経『無量寿経』『観無量寿経』『阿弥陀経』を末法の世に相應しい最高の仏説と受け止めて、先ほどの善導大師の浄土三部経解釈に基づいて成り立っています。こう申しますと、「なんだ、解

浄土三部経をベースに善導さんの解釈で浄土宗を立てるということですが、どうしても、どうして立てる必要があるのか。「勝手に浄土宗を立てたりして」って後で非難が起こるんですけれども、「いや、私は浄土宗を立てる必要があるんです」「善導さんの解釈によって私は浄土宗を立てます」。どうして浄土宗を立てる必要があるかと言えば、

——われ浄土宗を立つところは

（私が浄土宗を立てる意図は）

——凡夫の

（煩惱を断じていない一般の人が）

——報土にむまるとことをしめさんがためなり

（聖者のみの住まう高位の浄土——報土というのですが——に生まれることができるということを示すためです）

もしそれを示すことなく、浄土宗を立てなかつたら、その点がはつきりしません。「悪い人でも極楽往生できます」って言った時の「極楽」が、レベルの低い仮の極楽だったら興ざめですよ。「レベルの高い浄土に生まれられるけど、それはレベルの高い人だけです」となったら我々としては困るわけです。悪いことをした人でもレベルの高い極楽に生まれ変わることができるということが保証されないといけない。その保証をしてくれるのが浄土宗です。その浄土宗の教義を保証してくれるのが善導さんです。善導さんだけが、「悪いことをして

もハイレベルの浄土に生まれ変わることが出来ますよ」と言ってくださっています。他の人は言っていません。善導さんの解釈で浄土宗を立てなかつたら、「誰でもが無条件にハイレベルの極楽に生まれ変わる」ということはありません。ですから、浄土宗は必要だということです。

プリントの親鸞聖人の『浄土高僧和讃』に「智慧光のちからより、本師源空あらはれて、浄土真宗ひらきつつ、選択本願述べたまふ」とあるように、浄土真宗も浄土宗も法然上人が立てられたというのが元々の理解です。しかし今は残念ながら浄土真宗は浄土真宗、浄土宗は浄土宗となってしまうています。それは歴史的な経緯でそうなっています。

9 専修念仏の立場

次に、法然上人の浄土宗の基本的な立場は「専修念仏（専ら念佛を修めること）」であります。すなわち、

——口に南無阿弥陀仏を唱える称名念仏のみが、阿弥陀仏、釈尊、それ以外の仏さま方によって選び取られた、極楽往生のための、確実で、無上の価値ある行であります。この道以外に、生まれ変わり死に変わりする生死輪廻を超える道はなかなか見出しがたいのであります。悪人・善人、有智・無智、男女、貴賤の区別なく、阿弥陀仏の念仏による万民救済の本願にすぎり、他の行を差し置いて、専ら念仏しなさい。そうすれば必ず極楽往生できます。極楽往生をすれば必ず覚りを開くことができます。

こういう立場であります。他の行は差し置いて、ひたすら南無阿弥陀仏を唱えましょう、というのが浄土宗の立場であり、また法然上人の立場であります。そうすると（こういう表現は悪いんですけども）非常にうけまして、専修念仏の教えが広まっています。法然上人は、ご自身が六十六歳の時に書かれた『選択本願念仏集』の末尾に、

——之を信ずる者は多く、信ぜざるものは尠すくなくし

と書いておられます。

浄土宗が大嫌いで厳しく批判しておられる日蓮聖人（一一二二—一一二八二）は、嘆きながら、「（法然上人より二百年ほど前に書かれた）源信（九四二—一〇一七）の『往生要集』によって日本人の三分の一が念仏者になってしまいました。その後、百年経って永観が『往生拾因』を書いたがために日本国民の三分の二が念仏者になってしまいました。今度、法然が『選択本願念仏集』を書いたがために日本国民の三分の三が念仏者になってしまいました。」と、おっしゃっています。「良かった、良かった」ということじゃないですよ。「なんちゅうことや」と嘆いておられるのです。

良いこともあれば悪いこともあります。法然上人からするとお弟子さんにあたる明禪（一一六七—一一二四二）が、『述懐鈔』の中で、

——我が朝に浄土を勧め、念仏を広むる人多しといへども

（我が国で浄土をすすめ、念仏を広めた人はたくさんいるけれども）

——この上人は、信・謗ともに常の人に超えたり

（法然上人を信じる人も、批判する人も、いずれも常人を超えています）

つまり、人気投票ナンバーワンとワーストワンを独占しておられる。人気がある代わりに非難をする人も多いという事です。

——その故を尋ぬるに

（そのわけを探っていくと）

——一向専念の勧めより起れり

（専修念仏の教えを勧めているからです）

“一向専念”は専修念仏と同じことです。他の行は差し置いて、南無阿弥陀仏だけをお唱えしましょうということです。（※その理由は、可能性の点でも、価値の点でも、念仏が他の修行よりはるかに勝っているから、と解釈されます。）

10 大原問答（一一八六？ 浄土宗の教えを質す集会）

浄土宗は今まで聞いたことがない教え（いわば新興宗教）ですので、その教えを問いただすような集会もあつたと言われております。その場で法然上人は、「確かにどの宗派の教えも尊いけれども、浄土宗のメリットが一つだけある。何かというと、今は末法の世の中である。悟りを開くことも修行をすることも叶わない。ただ教えだけが残っている、そういう時代である。この時代に実際に修行することができ、確実に悟りを開くことができるのは浄土宗だけである」と主張されました。この「大原問答」あるいは「大原談義」は、京都の北のほう、大原（京都市左京区大原）で、天台僧顕真の主導によって行われたといわれております。伝説的な部分も多く、細かいところに関してはどれぐらい信じていいか分からないようですが、法然上人がそのようにおっしゃったところ、みんな信伏してしまったということです。

11 弟子たち

お弟子さんにどんな人があつたかということですが、プリントには、信空、弁長、証空、源智、隆寛、蓮生（熊谷直実）などなどありました。もちろんこちらの大学の大学にゆかりの親鸞聖人も入っております。それから、わりあい権力の座についた人も庇護者になっておられます。九條兼実（一一四九―一二〇七）は法然上人の名著である『選択本願念佛集』の執筆を依頼しています。（兼実は、妻の四十九日当日に法然上人を戒師として出家

を遂げ、藤原定家の『明月記』建仁二年一月二十八日条に「其の例を聞かず」と評されています。また後述の法然上人流罪の打撃と責任感から、流罪後すぐに亡くなっています。つまり専修念仏の教えは、大変幅広い階層に受け入れられたということになります。

12 専修念仏への批判 代表例…興福寺奏状（貞慶執筆）

けれども、先程から申しておりますとおり、専修念仏には批判もあり、これを禁止してほしいと朝廷に訴える動きがたびたび起きております。代表例として『興福寺奏状』の九箇条の失（過失）の概略を挙げておきました。ちなみに法然上人に直接関係があるかないかについて言えば、第八箇条だけは法然上人の責任ではありません。法然上人の教えを悪く解釈した人が出てきたということです。その第八箇条を除いた、他の八箇条は、一部同様の点もありますが、だいたい法然上人の教えから直接出てくるものになるうかと思えます。

- ① 「新宗を立てる失（新しい宗を立てる過失）」 新しい宗派を立てるのはけしからん。法然上人は宗を立てるほど立派な人ではない。善導さんから教えを承けたというけれども、時代的な差は五百年で、師匠から弟子という形で承けたわけではない。そして天皇陛下の許し（勅許）も得ていない。
- ② 「新像を凶する失（新しい仏像を描く過失）」 専修念仏者（南無阿弥陀仏をひたすら唱える人）だけに阿弥陀様の救いの光が当たっている新奇な絵を描いて喜んでいる。
- ③ 「釈尊を軽んずる失（釈尊を軽視する過失）」 「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏……」と阿弥陀様に基づ

- かり頼って、お釈迦様を何と心得ておる。阿弥陀様の教えを伝えたのは釈尊であるのに、お釈迦様をないがしろにしている。それでは仏教徒とは言えない。
- ④ 「万善を妨ぐる失（多くのすぐれた修行を妨げる過失）」 念仏以外を軽んじて修行をしなくてもいいとなると、それこそ仏教が衰えてしまう。
- ⑤ 「靈神に背く失（立派な神々に背く過失）」 「南無阿弥陀仏」と唱えて阿弥陀様だけを礼拝すればよい。神様は礼拝しなくてもいい、などと言う。日本は神の国であるのに何という態度であるか。
- ⑥ 「浄土に暗き失（浄土を知らない過失）」 念仏以外にも極楽往生できるのに、「往生のためには念仏に限る」と念仏だけを勧めるのは誤りである。
- ⑦ 「念仏を誤る失（念仏を誤解する過失）」 念仏にもいろいろある。心の中で仏様の姿を思い浮かべるとか、真理そのものとしての仏様と一体化するのも念仏である。口で「南無阿弥陀仏」と唱えるのは、他の修行のできない人たちがやむなく選ぶ、価値の低い修行である。にも関わらず、価値が高いなどと言って南無阿弥陀仏を唱える念仏に限るのは考えが偏っている。
- ⑧ 「釈衆を損ずる失（仏教徒を毀損する過失）」 一回念佛さえ唱えれば救われるから悪行を恐れる必要はないと言いつ、仏教徒に害を与えるものたち（一念義の徒）がいる。
- ⑨ 「国土を乱る失（日本国を乱す過失）」 こんな状態で念仏しか唱えない人間ばかりになれば、それこそお寺を建てる人もなくなるし、念仏以外の修行をする人もいなくなるし、他の宗派も衰える。仏教によって国家の安全が保障されているのに、安全保障ができなくなると国が減んでしまう。

どれも結構当たっているとします。私が言ったらダメなんですけど(笑い)。浄土宗は、仏教によって国家の安泰をはかるという発想がほとんどないんですね(あるのかも分かりません)。探してみますけど、現在のところ法然上人が国家の安泰に言及された例は思い浮かびません)。"自分が"この苦しみの世の中をどうしたら乗り越えることができるか。その一点しかないんです。国家がどう…という意識は(少なくとも)ほとんどありません。だから結果的に⑨みたいなことを言われるんだろうなと思います。

13 建永の法難(一一二〇七、七五歳)

以上のような事情がありまして、一方では大変支持されるんですけども、もう一方では厳しく批判されるのです。「でもまあ、専修念仏といっても仏教だから」ということで事なきを得ていたんですけども、建永の法難という決定的な弾圧が行われることとなります。

法然上人の弟子である住蓮、安樂が、東山鹿谷で善導の、極楽の様子を褒め称えたり、極楽往生をすすめたりする『六時礼讃』という行事をやっておりました。『六時礼讃』は音楽であり、節がつくので大変人気があったというのですが、後鳥羽上皇が熊野詣の留守の間に、上皇に仕える女性が住蓮、安樂について勝手に出家をしてしまいました。それだけでも大変なことなんですけど、男女関係、密通があったのではないかという風聞が流れて、その風聞に従って取り調べられた結果、密通があったということでしょうか(ここは研究上の問題があるので断定はできませんが)、結局は後鳥羽上皇の逆鱗に触れて住蓮、安樂、善綽、聖願という四人のお弟子さんが死罪になります。それから法然上人、親鸞聖人、行空といった、最低六人の方が流罪になります。法然上

人は本来は土佐だったんですが、讃岐に流されております。そこで門弟たちに衝撃が走るわけですけども、門弟のうち一番弟子の法蓮房（信空）が、

——住蓮・安楽はすでに罪科せられぬ

（二人は処罰されました）

——上人の流罪はただ一向専修興行の故

（法然上人がこのような目に遭われるのは、ただ専修念仏を盛んになさったからであります。※密通事件のためだとは言っていません。これは教団の認識を表しています。）

——しかるに老邁の御身、遼遠の海波におもむきましまさば、御命安全ならじ

（七十五歳なので、もし遠い四国に流されるようなことがあれば命も安全ではありません。また師匠が流されて我々が都に留まるのでは我々の面目が立ちません。しかもこれは勅命です）

——一向専修の興行をとどむべきよしを奏したまひて

（「専修念仏の教えを広めることはもう辞めておきます」と表向き天皇陛下に申し上げて）

——内内後化導あるべくや侍らん

（内々におすすめなさったらどうでしょうか）

と提案したら、みんな門弟たちは「そうだ、そうだ」と言ったそうです。すると

——上人の給はく

(法然上人は次のようにおっしゃいました)

——流刑さらにうらみとすべからず

(私は流刑と決まりましたが、決して恨みに思ってはなりません)

——そのゆへは、齢すでに八旬にせまりぬ

(何故かというと、私は八十歳に近づいてまいりました)

——たとひ師弟おなじみやこに住すとも

(たとえ、あなたがた弟子たちと師匠である私が同じ都に住んでいたとしても)

——娑婆の離別ちかきにあるべし

(娑婆での離別(死別)も間もなくのことです)

——たとひ山海をへだつとも

(たとえ、私が四国の遠い所へ行つて、みなさんが都にいて山・海を隔てたとしても)

——浄土の再会なむぞうたがはん

(極楽浄土で再会できるではありませんか)

宗教を信じている者の強いところがありますが、こう言つてなだめられたそうです。そして、専修念仏の教えを語つておられた時、一人の弟子に「法然上人、おやめください。世間の人はどう思つか分かりません」と制止されたところ、

—— われたとひ死刑におこなはるとも、この事いはずはあるべからず

（たとえ死刑になったとしてもこの専修念仏の教義を説かないわけにはいかない）

と言われたと伝えられています。

それから、流罪に決まってから九條兼実にこのような歌を残されたそうです。

—— 露の身はここかしこにてきえぬともここはおなじ花のうてなぞ

（互いに離れて命を終えるとしても、めざすところは極楽浄土に咲く同じ蓮の台なのです）

14 帰洛と入滅（一二二二、八十歳）

そして数年経ち、七十九歳で京都に帰ることを許されて、大谷（今の知恩院）において、一二二二年、旧暦の一月二十五日に八十歳で亡くなります。

15 弟子源智の阿弥陀仏造立願文（一二二二年十二月二十四日付）

亡くなって一年経過する少し前に、弟子の源智が法然上人への報恩のために阿弥陀仏立像を造られまして、仏様と我々凡夫が一体であるということを表したいと、お念仏を唱える人たち、念仏結縁者、数万人の名前を書い

て納入されました。「先に極楽に往生した人は、我々を迎え取ってほしい」と、三尺の阿弥陀仏のお腹の中に入れておかれて、それが長い間分からなかったんですけれども、昭和五十年代に分かりまして、今回、法然上人の八百年遠忌を記念して浄土宗の手に入ることになりました。その交名の一部に、法然、安樂、住蓮、善綽、聖願、源頼朝をはじめとする源氏の人たち、また平家の人たちの名前もありました。お弟子さんの源智は平家の出身であると言われています。このうち、安樂、住蓮、善綽、聖願という、死罪になった人の名前も仏様の胎内に入っていました。それから、尊成（後鳥羽上皇）と新院（土御門院）、つまり、弾圧をした側の名前も一緒に入っていました。これは、弾圧する・されるのも、一つの結縁である。この縁を大切にして一緒に極楽浄土へ行きますよという発想です。本当ならば後鳥羽上皇は、兄弟弟子を殺した憎んでも憎みきれない相手ですけれども、弟子の源智は殺された四人と、殺した側と両方、「先に極楽に生まれたら導いてほしい。私が先に生まれたらみなさんを導きます。」と書いています。法然上人のお父さんが亡くなられる時に「敵を怨むな」「悟りを求めなさい」とおっしゃったように、敵味方、両方一緒に極楽浄土に往生しましょうという考え方に繋がっているのです。プリントに「怨親平等思想」と書きましたが、これは「敵も味方も平等に見る思想」という意味です。生前、法然上人が手紙などで弟子に言い聞かせていた思想がここに具体的な形となって遺されているのです。

16 法然の人柄

最後に「法然上人のお人柄」について、少し和歌を載せています。（和歌も『四十八卷伝』第三十巻の末尾から採りました。）実は表題を「話の分かる法然」あるいは「冗談の分かる法然」にしようと思いましたが。と

いうのは、最初のは恋愛の歌ではないんですけれども、こんな歌を詠んでおられます。半分真面目で半分冗談なんです。

——極楽へつとめてはやくいでたば

（お念仏を勤めて早朝早く極楽へ出発したならば「つとめて」が掛詞）

——みのおはりにはまゐりつきなん

（身の終わり、つまり死ぬ時には、そして巳の刻の終り、つまり午前十一時前には、着くでしょう）

一つは、「極楽へ朝早く出発したら、十一時前くらいには着くでしょう」。もう一つは、「南無阿弥陀仏を唱えたら、死んで極楽へ着くでしょう」という意味の歌です。言葉遊びをしておられるんです。（これまでの解釈では、まさか真面目な法然上人が洒落たことを言われるはずがないという予断からか、「巳の終り」との掛詞をキヤッチする人がなかったようです。しかし「つとめて」が掛詞なら、「みのおはり」も掛詞でなければバランスがとれません。）ということ、冗談の分かる人だと思っております。

——われはただほとけにいつかあふびぐさころのつまにかけぬ日ぞなき

も、「心の端にかけない日はありません」と「心に思う妻あるいは夫」をかけておられるので、生真面目なだけのお坊さんではないということが分かります。こういう歌もあります。

—— かりそめのいろいろのゆかりのこひにだに

(男女の情愛、肉体を縁とする恋愛の場合であつても)

—— あふには身をもをしみやはする

(会う時に身を惜しんだりしますか)

これを私なりに解釈すると、「付き合っている男女が会う時に）時間がない、遠い、疲れる、金がない、などと言いますか?」。もうちよつと笑つてください(笑い)。「時間がない、遠い、疲れる、金がない」なんて言う場合は、所詮、好いてないんですね。もし好きならば身を惜しむはずがないです。これは表の意味です。裏の意味は、まして仏様の教えを求める時には、金がない、時間がない、疲れる…とは思わずに、それこそ身体をなげうつでも求めるべきであります、ということですよ。私みたいな者の話を、遠い所から、時間がない、金がない(お金はあまりかかってないかもしれませんが)、疲れる、と思わないで来ていただいてありがとうございます。ただ、話の中身がどうか問題ですけども(笑い)。そういう、恋愛をしている男女の心の中まで分かっている人だと思います。その目で読むと、次も結構きわどい歌かと思うわけです。

—— 阿弥陀仏にそむる心の色にいでは

(阿弥陀仏に私の心が染まつている。その心かもし色に出れば(※色彩に出るといふことも考えられますが、「色に出る」というのは、『百人一首』でも「恋愛感情が」態度に出る」といふことですので)

—— 秋のこずえのたぐひならまし

（私のほっぺは真っ赤になるでしょう）

もし私が阿弥陀様に恋をしていて、それが外に現れたとしたら、ほっぺが真っ赤になりますということですから、『徒然草』（三十九段）に載っていて他には伝えられていない言葉ですけれども、

——或る人、法然上人に「念仏の時、ねぶりにをかされて行を怠り侍る事

（ある人が法然上人に、「お念仏をしていますが、眠たくなって修行を怠ることがあるんですけれども）

——いかがしてこのさはりをやめ侍らん」と申しければ

（この障書をどうして取り除いたら良いでしょう）」とお聞きすると

——「目のさめたらんほど、念佛し給へ」と答へられける、いと尊かりけり。

（目が覚めた時に念仏をしたらいいじゃないですか」と答えられたとのこと。たいへんありがたい言葉である。）

私だったら、学生に「授業中はちゃんと起きとけ」と言ってしまうがちですが、法然上人のお人柄なら「眠たくなれば、寝ておいたらええ。起きている時に聞けばいい」とおっしゃるんだなと思って、反省するんですけれども…。次は個人的に大変好きな言葉です（『和語灯録』、『浄土宗全書』九卷六〇二頁）。

——あるとき又の給はく

(ある時、法然上人はまた次のようにおっしゃいました。)

——「あはれこのたびしおほせばやな」

(「ああ、このたびばかりは極樂往生したいものだなあ」と)

——その時乗願申さく

(その時、乗願房というお弟子さんが聞き咎めて次のように申しました)

——「上人だにもかやうに不定げなるおほせの候はんには、ましてその余の人はいかが候べき」

(「法然上人さえもがそんなに頼りなざげなことをおっしゃるのでしたら、我々はいつたいどうなるんですか」「今までさんさん、念仏唱えたら極樂往生できるから、絶対に大丈夫だっておっしゃったから、続けてきたんじゃないですか」と)

——その時上人うちわらひての給はく

(法然上人は「ははは」と笑っておっしゃいました)

——「蓮台にのらんまでは、いかでかこのおもひはたえ候へき」と

(極樂世界にあるという蓮池の蓮の台に乗るまでは、どうしてこの思いの無くなることはありませんようか)

僕は大好きなんです。「こうだ、こうだ」って強いことをおっしゃる反面、「そうは言うけどな、やっぱりな、極樂行つてみな分からへんねん」って一方ではおっしゃるんです。こういうところに法然上人の人間的な魅力があると思います。

時間を超過して申しわけありません。以上で終わらせていただきます。ありがとうございました。

参考文献

《伝記》

中井真孝『新訂法然上人絵伝』思文閣出版、二〇一二年

浄土宗総合研究所編『現代語訳 法然上人行状絵図』浄土宗出版、二〇一三年

小松茂美編『法然上人絵伝』中央公論社、続日本の絵巻一―三、一九九〇年

《著作・法語》

浄土宗全書検索システム <http://www.jozensearch.jp/pc/>

知恩院宗字研究所編集委員会編『法然上人のお言葉―元祖大師御法語―』総本山知恩院布教師会、二〇一〇年

塚本善隆編『法然』日本の名著5、中央公論社、一九八三年

《興福寺奏状》

鎌田茂雄・田中久夫『鎌倉旧仏教』（日本思想大系十五）岩波書店、一九七二年

《源智願文》

総本山知恩院布教師会『勢観房源智上人』一九八六年